

私を生きる

東京都 新宿区立四谷中学校 3年

上田 倫子（うえだ りんこ）

七・六パーセント。この数字を聞いてあなたは何を想像するだろうか。これは日本の人口の左利きの人やAB型の人割合にもほぼ一致する数字だそう。しかし、今から話そうとしていることは決してそのようなことではない。実はこの数字は、ある団体が調査した日本のレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどの性的少数者の割合なのだ。この数字を多いと捉えるか少ないと捉えるかは人それぞれだが、私はとても多いように感じる。私の周りだけでも左利きの人やAB型の人は何人もいる。それを性的少数者の人数に置き換えて考えてみると、性的少数者は、認識されていないだけでかなりの数がいる、ということがわかるだろう。

ここ最近、メディアでのオネエブームやジェンダーフリーの風潮によって、性的少数者とそうでない人との壁は徐々に低くなりつつあるようだ。しかし、抱き合っただけでじゃれる同性どうしの友だちを見て、同級生が

「おまえらホモかよ。」

というような発言をしたり、女っぽい話し方やしぐさが目立つ男子を笑ったりするということはまだ見られる。このような時、私は非常に残念な気持ちになる。それらの言動には、無意識であれ性的少数者を差別する心が表れていることを感じてしまうからだ。

私は生まれてきたときに女性という性を受けた。しかし、物心ついたときから、常に男女どちらの性でもいたい、という気持ちを持っている。フリルやリボンのついた女の子らしい物があまり好きではなく、スカートを履くということも恥ずかしかつた。小学生の頃は、クラスの男の子のように一人称が「俺」だった頃もあった。しかし、成長するにつれて周りの女の子の友だちが綺麗に、おしゃれになっていくのを見て、自分が女という性で生まれてきたことへの喜びも感じられるようになった。そして、いつしか自分の心の中に男性のようにも女性のようにもありたいという二つの思いが存在するようになった。そのことを自覚したとき、目の前の霧がぱっと晴れたような気持ちになったことを鮮明に記憶している。それと同時に、「どうしよう」という不安と戸惑いの気持ちが芽生えた。「自分はおかしい人間なのだろうか」という問いが頭の中をぐるぐると回った。このことを打ち明けてしまったら、両親、祖父母、親戚、親しい友だち、全ての人が私と今までのように接してくれなくなるかもしれない、と一瞬恐ろしくなったのだ。

私がこのような不安と戸惑いの気持ちを抱いたのは、人間は誰でも自分とは違うものを否定したくなる性質を持っていると私自身が考えているからだ。そのような性質は性的少数者だけではなく、有色人種、障がい者、在日外国人などへの差別意識にも通じていると思う。ではなぜ、そのような差別意識が育ってきてしまうのだろうか。私は、原因は家庭環境や幼い頃の経験にあるのではないかと考えた。人間の成長していく過程で幼少期は、保護者や身近な人の影響を受けやすい時期だ。そういった時期に家庭内や学校などでの会話や雰囲気端々に差別意識が存在すると、その情報を一気に吸収し、自分の考えの一部となってしまうのではないだろうか。

今の私には、自分の性の認識への恥ずかしさは全くない。それはきっと、私の育ってきた環境や様々なものとの出会いが影響している。思えば私は小さい頃から両親を通じて多様な人との出会いがあった。その中には数人の同性愛者の男性もいて、いつもありのままに堂々と生きるその姿を私はとても美しいと感じた。また、私の大好きな女性ミュージシャンは両性愛者だ。彼女は自身の曲や生き方などを通して人と違うことは誇りに思うべき個性なのだと教えてくれた。その他にも、本やインターネットから知り得た性的少数者についてのことなど、すべてが私に「身体は女でも心は両性」という性のあり方を「一つの個性」という風に思わせてくれた。

昨年十一月には、渋谷区で同性カップルに同性パートナーシップ証明書を発行するという制度が作られた。これにより同性愛者だけでなく様々な性的少数者に対する社会の理解が深まっていくだろう。しかし、差別意識というものを完全になくすのは実際にはかなり難しいことだと思う。かく言う私も「あなたは今、差別意識を全く持っていないのか。」と問われるとすぐに「はい。」とは答えられない。だがこの多様な世界を生きてゆく中で私たちには、自分の思う「普通」が世間の「常識」なのだという考えを捨て、新たな視点を持つことのできる柔軟な姿勢が求められるのではないだろうか。そして人を性別や見た目で判断せず、その人の持つ「その人らしさ」を一つの「個性」として、受け入れることのできる世の中になってほしいと思う。どんな個性を持っていたとしても、その人は「かけがえのない人」に変わりはないのだから。